





## ポケツト ジャーナル



右が受賞者の樹谷さん

★第1回小島輝正文学賞に  
樹谷優「北大阪線」が決定  
フランス文学者で神戸大  
学教授だった故・小島輝正  
氏は、生前、同人誌の論評  
を通じて新人育成に尽力さ  
れた。故人の意思を受け継  
いで設立したのが小島輝正  
文学賞（主催／小島輝正著  
作集刊行会）。

第1回受賞者は樹谷優さ  
ん（奈良市在住・64歳）の  
「北大阪線」と決定し、5  
月5日、兵庫県教育会館で  
「輝正忌と小島輝正文学賞  
贈呈の会」が行わされた。  
当時は小島氏ゆかりの文  
学関係者ら100名が出席、樹

谷さんを祝うと共に、故人  
の想い出をこもごも語り合  
った。その中で詩人の馬部  
貴司男氏は「この賞は、今  
後の文学活動の中での一つ  
の“起爆剤”となるだろう」  
と語り、同賞のもつ意義を  
強調した。

なお受賞作は文芸誌「遅  
刻」第6冊に収録されてい  
る。

### ★初の神戸国際コミュニ ティセンターが開く

5月28日に神戸国際コミ  
ュニティセンターが、旧市

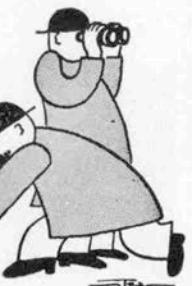
役所第3庁舎の江戸町SK  
ビルにオープンした。

同センターは市内在住の  
外国人への市政・生活情報  
の提供、並びに市民と外国人  
との相互交流を図る拠点  
施設として、神戸国際交流  
協会（笹山幸俊会長）が設  
置したもの。

約240坪のスペースには洋  
書、ニュースペーパー等が  
備え付けられ、ゆったりと  
ソファにもたれながら互いに

置いたもの。

新造豪華外航客船「クリ  
スタルハーモニー」が6月  
23日13時から26日5時まで  
神戸に入港し停泊する。



### ★クリスタルハーモニーが 神戸にやって来る

■開館時間は10時から20時まで。  
92番地 江戸町SKビル5F

の理解を深めようとする人  
々で連日盛況。語学堪能な6人の専従職  
員があらゆる相談にのつてくれる。



純白の船体をこの目で

### 二十五周年感謝のつどい

### 盛會のうちに開催

昭和四十五年五月、本運動がスター  
トして以来、多くの方の協力と  
支援に恵まれ、本日まで実践して  
参りました。今年は創立二十五周年  
を迎えるのを記念して、五月十  
二日に神戸市勤労会館で記念日を  
祝いました。

五月に入りまして、神戸、産  
業、読売、毎日、朝日の有力五紙  
が本運動と記念日の開催を紹介し  
て下さって賛同気分が盛りあがり、  
関心のある方からの賛同が相づ  
まつた。当日は心配された雨も降  
らず薄陽のさす天候に恵まれて、  
約六百人の方々の参加を得て盛  
大に開催されました。

先ず藤本代表が「皆様の長い間  
のご支援とご協力、特に間に  
置名で長いこと寄附を続けて下さ  
る蚊の渡さんや名和岩根さんには、  
は、心からお礼を申し上げたい」と  
と挨拶しました。

そして、元NHKテレビの子供  
番組の「お母さんと一緒に」の米田  
和正さん、グルーピーと、楽しく遊び  
ました。

次に当日の主旨を印刷したカ  
ードをつけた風船を一齐に空に向  
て飛ばして、楽しい時間を終了し  
ました。風船は三重県、奈良県、  
愛知県などから「拾った」と連絡  
をいただきました。私達の願い  
が、遠くまで飛びました。皆様、  
ありがとうございました。

### ★誕生日ありがとうございます運動



誕生日ありがとうございます運動  
新神戸市中央区御幸通8-1-6  
神戸市国際館1階郵便局の隣



に存在する酵素で、成人病や老化の原因とされる過剰な活性酸素を分解する働きがある。そのため予防医学の分野で研究が進められており、商品開発にしのぎをかける企業も多い。

今回は、そのSOD様作用食品のサンプルを3名様にプレゼントいたします。

■御希望の方は神戸っ子SOD係まで葉書で。

★童話を書いてみませんか  
「ほのぼのレイン」でおなじみの消費者金融の株レインでは、創作童話イベント「第8回ほのぼの童話館」を実施、創作童話を募集している。

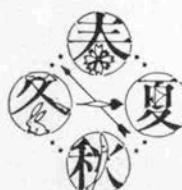
欲しい、演出力

「神戸まつり」も満十歳を迎えた。メインのパレードは五月二十日、久し振りの快晴に恵まれ、賑やかに、華やかにパレードが行われた。

フラー・ロードなど

パレードが行われる沿道

## 花時計



には見物の市民、観光客がぎっしり、百六十五万人△主催者発表▽の人たちで埋もれた。

流石に二十歳、はたちの年輪を感じさせるに充分なパレードであった。

国際色豊かな、市民の思い入れ、気持のこもつたなかなか素晴らしい内容をもつたパレードが展開され見物の人たちに好感をもって迎えられた。

ただ、二十歳のパレードとして反省すべき点も指摘される。パレードを

総合する演出家が不在で

話のつぼみ」という今回のコンセプトに相応しい子供達に夢を与える素敵な童話を書いてみませんか。

■応募、問い合わせは  
541 大阪市中央区淡路町2-3-9  
☎ 06-226-0909  
応募要項は各支店にも用意されています。

テーマは自由、400字詰め原稿用紙5枚、〆切は8月20日消印まで有効。

★あなたの咲かそう、童話のつぼみ」という今回のコンセプトに相応しい子供達に夢を与える素敵な童話を書いてみませんか。

テマは自由、400字詰め原稿用紙5枚、〆切は8月20日消印まで有効。

月14日(木)午後6時より、生田神社会館4F大宴会場で開かれます。会費15,000円。プログラムは「大聖地ベラレスを訪ねるインドの旅」スライド/インド料理を含むディナー申込み☎ 511-7084

リバードに第1回より参



誰もが経験した童話の世界



今年も燃えました

会事務局から贈られたもの

これは20回連続出場している10団体に神戸市民祭協

加している「月刊神戸っ子サンバチーム」に記念トロフィーが贈呈された。

これは20回連続出場している10団体に神戸市民祭協

会事務局から贈られたもの

★第5回関西大賞は5月9日、関西大賞推進協議会(奥田東会長)より大賞に山口哲子氏、樺本宇太郎氏。さわやか賞に守田厚子氏、小泉美喜子(本誌編集長)、中澤弘幸氏、波多野優香氏に決定。6月10日午後3時より、神戸国際会議場メインホールにおいて、関西大賞贈呈式が行われます。

★5月3日ポートビアホテル南館

1階大輪田の間で、兵庫県洋裁職業訓練協会の主催により、業界の振興発展に寄与し県功労者表彰を受章した、荒津正美氏受立記念祝賀会が開かれます。

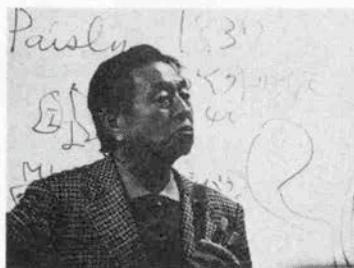
◎訂正とお詫び 本誌5月号神戸まつりガイドの名刺広告で、株式会社菊水總本店の取締役社長は会長に、電話番号は三八二一〇〇八〇に訂正し、心よりお詫び致します。

★踊り続けて20年

●KOBE POST

# K.F.S. NEWS 158

●4月一般公開講座  
立亀 長三氏  
(神戸芸術工科大学教授)



4月25日かんしんホールにおいて、神戸芸術工科大学教授の立亀長三教授が、「'90冬のヨーロッパ・ニューヨークの最新ファッショントレンド」を講演した。今回はバルセロナから英国グラスゴーのペーストにまで飛んで「今なぜ流行するのか」というルーツ解明の旅をスライド約100点をはじめて力説する講義に、約200人が耳を傾けた。

「'89年はペーブリー模様が、'90の春は唐草模様が、これが'90の冬になると、なぜ渦巻模様になるのか」ということのルーツを訪ねて私はスペインのバルセロナへ旅立ちました。

2年後スペイン・バルセロナでオリンピックが開催される。このバルセロナの町は、カタルニア地方で、ピカソやダリ、ミロを生んでいるが、天才建

## コウベ・ファッショントレンド

神戸ファッション市民大学OBによるグループ  
神戸のファッション都市化をめざす

事務局／神戸市中央区東町113-1 大神ビル9F  
月刊神戸っ子内 TEL.078-331-2246

## '90冬は、唐草から渦巻きに エコロジイが続く

建築家アントニオ・ガウディの教会は、今も三人の弟子が仕事を続けているのです。ガウディの作品を見るとまったく「エコロジイ」を感じるんです。この「エコロジイ」を生物の生態学といった意味から、今年は地球とか火山といった宇宙的な環境としてとらえています。ガウディの作品には海や山のものが彩られています。例えばヒトデとか貝とかね。このガウディの作品は、英國グラスゴーの近くにあるペーストという町の教会などの壁画にルーツがあります。そこには唐草から渦巻が現わされているから面白いですね。この起源が消費者を納得させるんです」と流行のルーツを解明した。

### ●K.F.S.パネルディスカッション のお知らせ (K.F.S.トーク)

今月はパネルディスカッションを行ないます。K.F.S.についての要望や近況報告などはもちろんのこと、それ以外にも様々な意見をお聞かせ下さい。

とき 6月15日(金)  
ところ 中小企業会館センター プラザ16F  
会費 会員無料 一般1000円

〈私たち新入会員です〉



松野 芙美子さん

自宅で洋裁教室をしています。毎日家の中で仕事をしておりますと世の中のことが疎くなると感じまだ勉強したいと思いこの度入会させて頂くこととなりました。良い話を聞き多くの人達に会い自分の世界を広げたいと思います。



本田 洋子さん

アパレル関係の仕事をしていますが、以前からK.F.S.の誘いにより立亀先生の講演やその他の講習会に参加させて頂いておりました。神戸をより美しい街にという願いをもっておりました。



松田 明美さん

トアロードで手造りの洋装店をしております。洋裁の世界だけでなく幅広く色々な業種の方と交流したいと思っております。又、各分野の先生方のお話をきき、見聞を広めたいと思います。

## るぽるたーじゅ神戸



有井 基 — Hazine Arai —

カメラ・池田 年夫

# 六甲山牧場

△フリーライター△



年間70万人の利用者がある  
六甲山牧場の新たな見学コ  
ースとしてすっかり定着し  
た神戸チーズ館。

若葉が匂う。吹き通る風まで、新緑に染まっている。六甲山頂へ、有料道路のゲートを越えた辺りから、その風のシャワーが、残っていたねむ気を覚ましてくれる。ふもとから車で、20分も走っていないのに。

神戸市立六甲山牧場で「万葉人のたべもの展」(六月三十日まで)が開かれている、というので出かけたのが、牧場は、また少し、きれいになっていた。牧場内の電線を、すべて地中に埋めるといった目に見えないところにカネをかけるせいもあるのだろう。

面積一二五・八ヘクタール。そのうち甲子園球場の約六倍に当たる二二・七ヘクタールを一般公開している。標高ざっと七百メートルだから、晴れた日の大阪湾の眺望も申し分ない。思いっきり深呼吸をしたくなる空気のうまさは、新鮮な再発見でもある。

場長の谷口正夫さんと、この三月末まで九年間、場長をつとめた中村直彦さん(現神戸市北農業委員会事務長)の案内で、牧場の中心からやや南寄りの「神戸チーズ館」に入った。三年前(一九八七年)に、約四億円をかけてつくられたチーズ館は地上二階・地下一階。牧場そのものがスイスの山岳酪農をモデルにしただけに、館のデザインもスイスの農家をイメージしたものだという。

褐色の屋根に白い地上二階建て。石壁をまとった地下はチーズ工場だ。牛舎でしぼりたての乳を原料に、カマ



地下1階の工場では、全国でも初めての試みといわれるチーズの製造工程のすべてを見学することができる。



「私も思ひは同じです」と谷口正夫・新場長。中村さんの話に一つ一つうなづく表情は、ひかえめながらも牧場経営に対する責任感がひしひしと伝わってくる。

「観光にしても、リゾートにしてもこれから時代は人間の生活の原点を問うような施設づくりが必要です」と語る中村直彦・前場長。

ンペールをつくっている。その製造工程のすべてが、ガラス越しに見学できるのも全国初の試みなら、一個（一  
二〇グラム）八百円の「神戸チーズ」が、年間で十万個  
売れるというのも、いかにも神戸らしい。

「牧場の乳牛は三十三頭。それだけでは、まかないき  
れないでの、市内の農家に入れてもらっています。しほ  
りたてミルクとして販売していますねえ。しかし、製  
造能力からすればチーズは今で限界ですわ」

畜産専攻とはいえ、チーズづくりについてはズブの素  
人だった中村さんの、試行錯誤と苦労は想像に余る。

六甲山牧場を、都市と農村の接点と位置づけ、農業や  
農畜産物の啓蒙普及と消費拡大が役割りだとする中村さ  
んは、そのためのアイデアを、次々と実行に移してきた。

「場長に就任した九年前、年間利用者は二十三万人で  
したが、今では七十万人。全職員の努力のお陰です」  
キヤツチフレーズの八人間と動物と自然のふれあいの  
場▽には、赤ちゃん五十四匹を含むヒツジ百五十四のほか、  
乳牛、馬、ヤギ、ウサギが放たれ、そこに人が溶け込ん  
でいる。なんという牧歌的風景であろうか。

毛刈りがすんだヒツジたちは涼しげだ。刈りとった毛  
は一キログラム五百円で売っている。ウール洗剤できれ  
いにしたのを持ち寄つて手つむぎの講習会を開き、毛糸  
にすれば約六百グラム。セーター一着分は出来る。ご婦  
人がたに喜ばれるのも当然だろう。

「観光やリゾートも、これから時代は、人間生活の原  
点を問い合わせ、生きざまを追求し、生活を深く豊かに変える  
ようなものが要求されると思います。展示ホール（チ  
ーズ館一階）の企画も、その方向で考えていくませんと…、  
といつても予算がありませんので、手づくりです。つら  
いところですよ」

昨年八月、平城京の長屋王邸跡から発掘された木簡  
（木の板に墨書きした文書・木札など）を参考に、牛乳を  
煮詰める当時の製法で古代チーズ「蘇」を再現。入場者  
に試食提供して話題を呼んだ。いま開かれている「万葉

万平方メートルの邸宅跡から出土した木簡は、約五万点にのぼるという。

その木簡を解説している奈良国立文化財研究所の協力を得て展示したが、いずれも職員の手づくりだ。コーナー入り口のタイムトンネルも、稻わらで竪穴住居を再現し、くぐり抜ける仕組みになっている。平城京に限っていえば、庶民の大半は掘立柱の建物に住んでいたようだが、ひろく「万葉びと」となるところでいいのだろう。

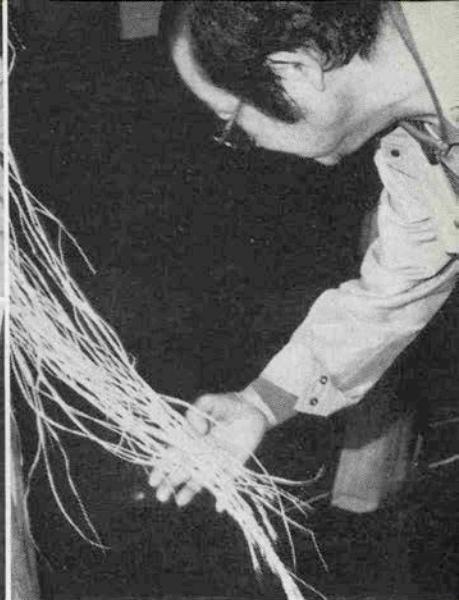
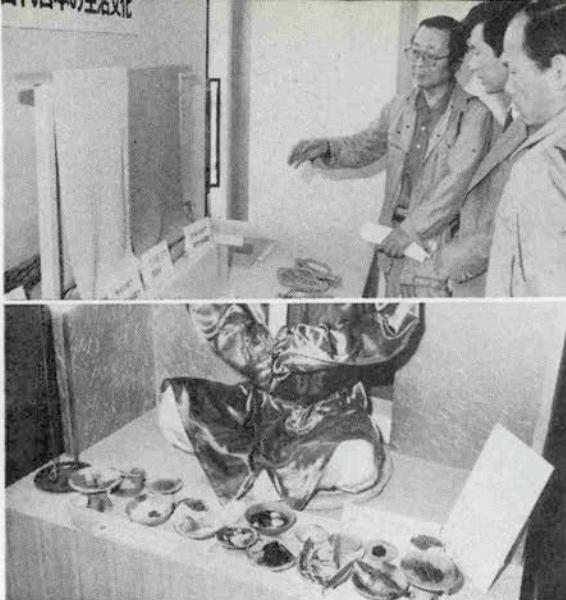
小学生の団体が多いだけに、正確さ、わかりやすさが求められる。そのため昨年、岡山県総社市の国司神社に伝わる「赤米」のものを取り寄せ、西区の農家で栽培してもらつて約百八十キロを収穫。日を限つて入場者に試食提供もした。赤米は中国雲南省に起源するといわれ、赤い色素を含んでいて、搗き米だと淡いピンクに炊き上がる。国司神社のほか長崎県、鹿児島県の二つの神社から赤米の稲を手に入れ、うるち米やもち米と比較展示したものも心にいく配慮である。

対比の面白さは、子どもたちをも捉える。雲南の地からわが国へ伝えられた赤米が、今も雲南やタイのアカ族などの常食となつていてVTR。牛乳を十分の一まで煮つめて「蘇」をつくると同様、アラビアのベドウインが、数千年変わらぬ製法でジャミード（チーズ）をつくるVTR。いずれも、食文化の伝播、古代と現代の食文化について考えさせる格好の教材だろう。

「長屋王は何を食べていてか?」も、展示の苦心がのぞいている。何しろ、北九州から“ふなずし”が届き、冰をとり寄せて酒のオンザロックを飲んでいた長屋王のことだ。想像される食膳は、豪華をきわめたろう。木簡を手がかりに職員たちが再現したメニューは

イノシシ、シカ、キジ、サケなどの干し物。セリ、ワカメ、カララ、ヒラタケなどのあつもの。小ダイ、ハマグリ、クラゲ、コノシロなどのなます。アジ、イワシ、アユなどの塩焼き……そして漬物まで四十種余り。

これを日替りメニューで出す。



古代日本の食文化、生活文化を探る「万葉人のたべもの展」一写真右／古代日本の米「赤米」の稲を手にとる筆者。左／赤米のぬか、紫稻の草で染められた絹織物（上）と長屋王の食膳（下）

人のたべもの展——古代日本の食文化を探る」は、その発展的な展開である。

古代の食べ物については「古事記」「日本書紀」「風土記」「万葉集」などにも記述はある。だが今や、木簡のもたらす情報量はおびただしい。とりわけ、政敵・藤原氏の陰謀で一族と共に果てた悲劇の宰相「長屋王」、六

対照的に「庶民の食膳」は、赤米の飯に代わってアワ、ヒエのめしと煮豆など文字通り一汁一菜だ。食事は一日に二度。激しい労働をする人は間食でつないだが、はたして何でカロリー、カルシウムをおぎない得たやら。飽食の貴族と、食うにも困る庶民との構図は、このイントの最も印象的な見どころだろう。だが、草木染の絹織物の微妙な色あいもいい。一つは赤米のぬかで、もう一つは紫稻の草で染めたものだが、これもオリジナルだという。中村さんが目ざした「人間の生活の原点を問うような施設」は、着実に根を下ろしたといえそうである。

だが、課題がないわけではない。神戸というエキゾチックな街だからこそ、モデルとしたイスの雰囲気がマッチした。後背地に農業という資源があったから、農業振興と文化レクリエーションとが無理なく合わさった。

その特性を生かした本物志向の村づくりが、いま、受けている。さて、次のステップを、どう踏み出すか。終始ひかえめな谷口新場長も、思いは同じである。二階のレストラン「神戸チーズ」で、チーズフォンデューをメニューとするコースをご馳走になりながら、中村さんの話に一つ一つうなづく谷口さんの表情を見ていて、牧場経営の、人目につかない苦労や、観光牧場としての企画の苦心が痛いほどわかった。

そんなことを抜きにすれば、このレストランは、くつろぎの空間である。大きな山小屋のようて天井が高く、南北両面のガラス窓、天窓からの採光も、やわらかな明るさ。客席は六十六席、南に面して席をとれば、牧場のみどりを越えて大阪湾は一望。空のブルーを入れると、これ以上の、自然の良彩にめぐまれた眺めは、他に得がたかろう。



チーズ館の見学通路から眺めた牧場…。人の心をなごませる牧歌的風景がそこにあった。

メニューは、神戸チーズ主体のチーズ料理、牧場名物バーべキューなど。ヤユする気ではさらさもなく、ここにも「神戸市商法」あり、と、まぶしい気分さえする。

伊々田 桃

絵／羽多悦子 △題字も▽

# 夏の遠景



記憶が薄れ、野田メリヤスの車に乗った達男が、目と天井の間にたゆたつた。和美とどこで知り合ったのだろう。めくれあがった唇で、和美的滑らかな唇に触れたことがあるのだろうか。

依子は、使わずにいた千円札を、ジーパンのポケットから引き抜いた。

殊勝なふりして、あの偽善者め。

依子は、口穢く罵り、これ以上小さくならないところまで、千円札を指でひねりつぶした。

翌日の夕方、依子は大川橋の喫茶店に来ていた。

店の扉が音をたてて開き、分厚い唇が視界に飛び込んだかと思うと、達男が、片手で拝むようにしながらベコベコと近づいてきた。

「僕、アイスね」

ウェイトレスに注文をして、依子の向かい側に座った。帰る寸前になって、得意先から電話が入るもんだから」

達男は、めくれあがった唇を力ませて言い訳をし、おしゃりで額と鼻の頭に浮いた大粒の汗を拭き取る。「怒ってるの」

「どうして？」

依子は首をかしげて笑った。達男が用心深くしゃべつているのがわかった。そして、依子の内面を読み取ろうとしていることも。その小狡い行為に、依子は苛立ちを覚えたが、顔には表さずいた。

昨夜八時半頃 和美は達男の運転する車で帰つて行った。車の音が遠のいてしばらく経つてから、依子の部屋へ入ってきた母が、「きょうは済まんかったね」と言つた。

「帰つて来て迷惑だったよね」

首を横に振る母の目に、涙が盛り上がつてくる。

「何でこんなふうになつてしまつたんやろう」

父に柔順でありながら、娘の前で愚痴をこぼして泣く

母を、依子は冷然と見つめていた。その惨めな泣き方が、依子を不快の淵に追いやることに、母はいつこうに気がつかないのである。母の目の前で荷物をまとめ、明日の朝一番にでも、この家を出て行きたい気分に襲われた。

「眠いの、もう、出て行つてくれないかな」

そう言うと、母は顔から手を離した。別の返答を期待していたのだろうか、間の抜けた表情で依子を見返した。

「婚約のこと、黙つとて悪かったと思うとん、でも……」

用心深く黙りこんでいた達男が、依子との沈黙戦に敗れたよう、口を開いた。

「あら、私、気にしてないわよ、かわいい人じやない、和美さんって、こっちへ帰る前からつきあつてたの？」

「自分でも、何がなんだか、よおわからんでア」

めくれた唇に、茶色の液体が滲んでいた。見てはいけないものを見てしまった気がして、依子はテーブルの花へ目を移した。

口を切つた彼は、勢いづいてしゃべつていた。

六月の初めに、父に連れられて入つた中華料理店で、和美を紹介された。その晩に、どうだ、と父に尋ねられ、ええまあ、と口を濁しているうちに、次の日曜日から家事見習いとして、和美は家へやつて来るようになつた。これまでに二度、映画を観に出かけたことはあるが、気持ちの騒いだことがない。それなのに、電話口で依子の声を聞くだけで、頭の中が依子で埋めつくされてしまい、今、自分がどこにいるのかもわからないような状態になる……。

「達ちゃんて、口がうまいのねえ」

「ほんまのことア」

ストローをやみくもに搔き回した。

アイスコーヒーがなくなる頃、ためらいがちに彼が言った。

「ヨツコちゃんは何で三年間も帰らんかったんでア。僕やつたら、出て行かへんな、きっと」

「何が言いたいの」

依子の厳しい口調に押されて口を結んだが、彼はやはり言うべきだとでも思ったのか、

「おやじさんもおふくろさんも、ヨツコちゃんを大事に思つてゐるでア」

怒つたように言つた。

「いいかげんなこと言わないで。父なんて私を無視してるじゃない」

「それは」

「いいわ、もう」

依子は横を向いた。まなざしの先に、父の頑固な背があった。達男に、もう少ししゃべらせたい気もないことはなかつた。

喫茶店を出たところで、偶然、東方から来る和美を見つめた。隠れるには遅すぎるため、平然と待ち受けることになつた。半歩前に立つ達男の肩が、緊張で堅く引き締まつているのがわかる。

和美は、同じ年頃の女の子と一緒にいたが、二人を認めたときに別れていた。昨年できたばかりの文化教室へ、編み物を習いに来ていると言い、振り向いて、あれ、といふうに指を差した。その方には、薄桃色の建物が見えた。

和美は軀をもぞもぞと動かし、白いレース糸で花びらを編み、それを幾つもつなぎあわせて長方形にしたものを作った。かばんの中から取り出した。

「テーブルセンターなんですが、げた箱の上にどうかと思つて、まだすこくへたなんだけど、どうかと思つて受け取つてほしいらしく、達男へ差し出し気味に広げる。達男が黙つてゐるので、和美はうなだれてそれを元にしまつた。和美は恨めしそうに依子を一瞥してから、おもむろにその場を離れた。

運転席に座つてから、

「ごめん、ちょっと待つてて」

達男が勇んで外へ飛び出した。

懸命に走つて行く彼をバックリーの中に見た。和美に追いつき、何かをせかんに伝えていた。和美は嬉しそうに幾度も首を上下にする。

依子の内に、また苛立たしい感情が押し上げてきた。

「菖蒲池に行きたい」

戻つてきた達男に、依子はせがんだ。

「あそこ、花の名前はついてるけど、何にもないただの池でア」

「いいの、行つて」

足で車の底を蹴つた。

「変わつてるよ、ほんと、ヨツコちゃんは」

車はG町の外れまで走つた。

池の水は濁んで、コールタールを詰め込んだようだ。

誰もいないこんなところを狙つて捨てに來るのか、所々にこまごまとした不燃物の小山ができている。見るに耐えられない、荒廃した景色だ。

「わかったやろ、帰るでア」

ハンドルを切りかけた達男の手に、依子は手を触れ合わせた。

「達ちゃん、キスして」

和美を見たために、張り合う気持ちが起きたわけではない。和美は問題ではなかつた。父にうまく手なづけられている達男を、その手から奪つてやりたいと思つた。唇がめくれあがつた唇によつてふさがれた時、固い殻のようすに頑強な父の背中が見えた。

ちくしょう……ちくしょう……

依子は背中に悔しい気持ちをぶつけていた。

帰郷後一週間が経つても、父の態度は変わらなかつた。母は常にぎこちなく、一步でも近寄ると身をかわすくせに、時折、意味もなくへつらつた笑顔を向ける。結局、依子は家族と隔絶したも同然で、家にいるのが落ち着かなく、気分が荒れたり沈んだりした。

三日に一度の割合で、依子は達男と会っていた。初め

は、憂さをまぎらす程度に呼び出していたものが、知らない内に父と張り合う気持ちを起していた。何とかして、父の掌中から達男を引きずり出した。父が築きかけているものをこの手で壊し、父の支配できないものもあるのを、実践でもって見せ付けてやりたかった。

そのために深夜、内線電話を使って、離れにいる達男を起こしもした。

同じ屋敷内では、却って落ち合うことができないのがわかつていながら、依子はわざと、今すぐ会いたい、と駄々をこねる。無理な願いを訴えて困らせるのも、相手の気を昂揚させるのに効果がある、と聞いたことがあった。

「僕も会いたい。でも、ここじやどうにもでけんでア。

わかるやろ」

「わからん、わからん」興奮した達男の声に乗せられて、依子もつい方言が飛び出す。

「弱ったなア」

声にやるせない哀歎がこもり、これ以上迫ると、達男は眞面目に忍んで来そうだ。

「じゃあ、明日の夕方、会ってくれる」

媚びを含んだ甘え声で、達男のこりこりに膨らんだ気持ちを柔らかく撫で、例の場所で待ってる、と約束だけはきちんとして、切り上げる。

その夜も、父母が寝静まつた頃に電話をかけ、さんざん達男の心に大小の波を搔き立てる。

「いいわ、無理はよすわ。その代わり明日、待ってるか



ら

「ごめん、明日は」

「だめなの」

彼は答えない。

受話器を握った掌が汗ばみ、パジャマで拭った。足元においた懐中電灯の光にまつわりつく蚊に、依子はいらいらし始めていた。

沈黙が続く間に、受話器がただの黒い物体に見え、投げ出すように電話を切っていた。

翌日になって、達男が和美を映画に誘ったことを知り、依子は屈辱を感じた。がすぐに、自分より和美が優先されたわけは、達男の行動を支配できる父であることに気付いた。

数日前も達男と会い、別れ際に次の約束をする時、彼は辛そうに口を結んだ。会う回数が増えれば増えるだけ、依子に引き寄せられているのに、いくら心を奪われても、父への義理を失ってはいなかつたのだ。

夜が深まるのを待ちたびれるほど待って、依子は達男に電話をいた。彼からもたらされる言葉は、依子の想像していた低姿勢このうえないものではなく、逆に、

僕の立場も理解してほしい、と力強く訴えられた。その上、度重なる深夜の電話が、いつのまにか彼の内部に強固な部分を作り上げてしまったのか、じわじわと優位に立とうとする。

「何も聞きたくないわ。今からそちらへ行くから。私を愛してるなら、達ちゃんも階下へ出て来てちょうだい、いいわね」

強硬に言い放して切った。

一度部屋へ戻り、パジャマからTシャツとジーパンに着替えた。部屋をまたそつと出て、そのまま静かに勝手口へ降りた。気持ちを静めて鍵を外した。扉を引き開けた時、きりきりとレールの音がした。後ろを振り返つて見た。転が横になって通れるだけ開き、外へ滑るように出た。

冷んやりとした外気が、シャツからみ出した腕に快い。雨が近いのか、巨抱色の夜空に星はない。草履を地面に擦らないように、一足一足を大きく上げて離れ家へ向かった。暗闇の中に、人の輪郭がやや白く浮き上がつて見える。息を静めて近づく。

「怖いことするでア」

腕が伸び、いきなり引き寄せられた。耳たぶに湯気のように熱い息を感じた。危険なところでの抱擁が、二人の軀を熱くした。

「僕の眼中にはヨツコちゃんしかいてへん。あのこには悪いと思ったけど、こればかりはどうしようもないもんなア。ヨツコちゃん、あんまり僕を刺激せんといてえな」達男の手が、依子のTシャツの上に当たつた。シャツの下には、何も身につけていなかつた。彼につきまとつてゐる父を押し退けるように、胸元を彼へ向けて突き出した。達男の指はびくっとして離れ、しかしすぐ元の位置に戻り、次第に力を注いできた。

「今度、抱いてえか？」

耳元で達男が喘ぐ。

「車の中なんて厭よ」

「ちや、ちゃんとした場所やつたら、ほんだえんか」息遣いが荒くなる彼とは逆に、依子の頭の中は却つて汗え渡ってきた。案外、父から達男をもぎ取るのはたやすくかもしれないと思った。唇を触れ合いながら、虫の鳴き声をはつきり聞いていた。

「もうすぐお盆やねえ。達ちゃんも和美さん誘つて、盆踊りに行くんやろう」

「な、何で、今、そんなこと言うんでア。僕は今、ヨツコちゃんのことしか頭にあらへんのに」

依子の肩を両手で掴んだ。細長い指が皮膚に食い込む。「もう言わへんか、もう言わへんか」

依子が、うん、と頷くまで、達男は激しい力で揺すり続けた。